

虫明亜呂無の本・2

L'arôme d'Aromu

野を駈ける光

虫明亜呂無

玉木正之 編



虫明亜呂無の本・2

野を駈ける

虫明亜呂無

虫明垂呂無 むしあけ・あろむ

1923年東京生まれ。1946年早稲田大学フランス文学科卒業。作家、評論家。1991年没。

玉木正之 たまき・まさゆき

1952年京都生まれ。東京大学教養学部中退。スポーツライター。

虫明垂呂無の本 L'arôme d'Aromu 2

野を駈ける光

1991年5月15日

初版第一刷発行

1991年9月10日

初版第三刷発行

著者 虫明垂呂無

編者 玉木正之

発行者 関根栄郷

発行所 筑摩書房

東京都台東区蔵前2-6-4 1111

電話 03-5687-2680 (営業)

03-5687-2670 (編集)

振替 東京 6-4123

印刷・製本 中央精版印刷

©1991 Aromu Mushiake Printed in Japan

ISBN4-480-70122-2 C0395

野を駆ける光

目次

第二章 馬への恋情 7

野を駆ける光 競馬について 9

北へかえる 札幌・函館競馬を見て 47

ともかく函館記念 70

第二章 トラック往来 79

光と色とローカルと 81

さよなら、福島の花祭り 86

雨レース、必勝の眼目 91

大騎手・野平祐におくる 97

雨の古都に名勝負 102

騎乗技術の巧拙 108

競馬の花「有馬記念」 114

馬のリズム感覚 118

中山千六百 123

恋の馬券 83

初秋の一日、後日に備える 88

理想の線、現実の線 94

華麗な野外劇 100

お馬が大事? 105

競馬と人生 110

熱狂の中山 116

競馬ブームの実態 121

町ぐるみの競馬熱 126

計算どおりのレース 129

予想紙は一編の小説 132

サラブレッド作りは夢作り 134

第三章 馬からちよつと離れますが 139

あの女にだけは 141

大理石の碑 155

納豆とネギのにおい 173

ジョギングする女たち 178

変身の伝説 185

『同棲時代』の魅力 194

男と女の恋愛は完全に賭けである 200

美しきものへの憧憬 204

森の騎士 ベートーヴェンとワーグナーのなかの心象風景 220

ヴェルディの『オテロ』 227

第四章 対談 競馬論 この絶妙な勝負の美学 VS 寺山修司

233

単勝の思想 235

幸運を信じる心 258

馬の相聞の詩 278

英雄はつねに人工的だという思想について 287

けだものたちにとって故郷とは何か 294

競馬のアニミズム 306

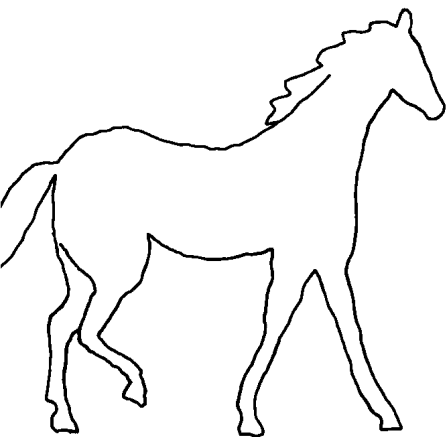
騎手、馬上に消ゆ 314

編者あとがき スポーツと生活 玉木正之 319

虫明虫居無の本 L'arôme d'Aromu 2
野を駆ける光

装幀・装画・カット◆和田誠

第一章 馬への恋情



野を駈ける光

競馬について

ならの木立のなかに、雨がふっている。

ならの木々が、そんなところに立っているはずはないのに、白い木柵と濡れた芝生におおわれた内馬場をへだてて、スタンドから見ると、あれは、ならの林だ、と思う。木々の幹がふとく、枝葉のしげりがさかんである。

木立のひろがりから、僕のいる所まではおおよそ五百メートルの距離がある。中間は緑にそまった芝生のひろがりしかない。障害コースに設けられた生籬いけがきが、ひときわ、濃い緑をしている。雨雲が低くたれこめて、光の乱反射がない。

櫟かし、でもよい。くぬぎ、でもよい。古代武蔵原生林のなごりがいたるところにある台地のひろがり。台地は櫟けやきの大木を育て、雑木林を繁茂させる。青梅、国分寺、府中とのびる

台地が多摩川の流れにむかつてつきるところに、東京競馬場は設けられている。その台地を構成する赤土と砂礫されきの関東ローム層。高度二千メートルの山地にはえた針葉樹が化石になって発見された層と層のわれ目をぬって地下水が走っている。澄んだ、かるい水である。台地はめぐまれた地下水を汲みあげて、縦横に田におくりこむ。ならや、くぬぎの林のかたわらに、音をたてて、泉がほとばしる。競馬場に立つと、いつでも、泉の音が地の底から湧きあがってくるようだ。雨の日は、ことにはっきりと聞える。

多摩川をへだてて、台地にむかいあうのは神奈川が多摩丘陵である。丘陵は、ならの林の梢こずえごしに、ゆるい線を描いている。削ぎとったするどさで赤土の崖が直立している。多摩の流れが急激なカーブをきるあたりだ。

僕は少年のころ、そんなカーブの川原で、友人たちと飯盒炊きをしたことがあった。八月、真夏のさかりで、川原の石が白く焼けた。川原から、スタンドの屋根や塔が見えた。木々のひろがりの上に、塔は夏空を一点にささえて、かがやいていた。僕たちの周囲には、かげろうが燃え、遠くの林も塔もゆれて、輪郭はさだかでなかった。夏の空だけがしっかりとした高さだった。

「あれは、刑務所の見張り塔だろう」

と、僕たちは薪を拾いながら、語りあった。

僕たちは二度と塔の方に目をむけようとしなかった。未来のある僕たちには、囚われの人たちは無縁のものと思われた。そんな人たちをいれる建物の存在は、すぐ、忘れられてしまった。僕たちは川原で、それぞれの将来への希望をかりたり、激しい水の流れに飛びこんで泳ぎ、魚をとり、一日をすごした。ゆたかな未来が僕たちを待っていた。

雲が厚味をまして、雨が降りしづく。僕はならの林から、コースの進行方向にしたがって目をうつしてゆく。スタンドの向こう正面をへて、馬場は第三コーナーにむかい、かなりの上り勾配をみせている。勾配をのぼりきって、コーナーをまがりきると、コースは急なくだりにかかる。三分三厘と呼ばれている地点だ。強い馬は、ここで一挙にギヤをいれてスピードをあげる。レース展開の重要なわかれめとなる。その地点に、櫂の群が立っている。葉をおとした梢は、ビュッフェの建築を描いた絵のように、鋭い線をみせて雨雲の一角に突きささるうとしている。

鑿のみの一突き。つめたい鑿の先に指をふれよう。ふれた指先につたわる重量感。なにか臭覚を刺激する金属の焼けたにおい。そのにおいが、広い場内の起伏のすみずみに拡がりはじめ。雨にたたかれてしぶきをあげる芝のにおいも、金属的だ。暗くなりはじめた馬場の内で、前のレースの結果をしらせる掲示板に電光がともっている。

僕は向こう正面から、ならの林のあたりに、ふたたび、視線をかえす。

幾頭かの馬が雨の芝コースを駈けている。木々の茂りに雨をさけて、立ちどまったまま横に頭をむけた馬が、一頭だけ集団からはなれて静止している。その前を、もう一頭の馬がかけてゆく。騎手の赤い帽子がひとつの点線となってながれてゆく。馬は木々の間から突然、姿をあらわしたようである。尾がたわわに後になびき、足の蹴りは力づくよくゆくりと、正確なほこびをみせている。馬は幻想のように、薄暮のなかに鮮明にうきあがって、いかにも多くの時間を必要とするように、足をゆっくりと空間にのびしながら僕の視野から消えてゆく。

各馬が並足でスタート地点にむかって集まりはじめている。まもなく、レースが開始されようとしている。

僕は心のたかぶりをときほぐそうとして、レインコートのポケットをあらあらしくまさぐる。指先だけで、たばこを一本ぬきとる。火をつける。一瞬、マッチは透明な焰をあげる。焰はすぐ青白い燐の光をひろげる。しめった燐のにおいは、なぜか欲情を刺戟する。焰が消えると、欲情もしずまる。

レースは三つの展開ケースがあった。スロー・ペースではじまり、後半にハイ・ペース

にかわるもの。あるいは、その逆。そして最後に終始かわらず平均ペースですすめられてゆくもの。レース開始直後に先頭集団をつくるのは三頭の馬だ。しかし、Aが先頭になったときと、Bや、Cが先頭になった場合には、それぞれスピードの配分がちがうだろう。すると、それに応じて、中団の馬たちも、後方の集団をゆく馬も、自分たちのペースを變更してゆくはずである。僕は幾通りもの展開模様を考えた。どれもが正確なようでいて、僕は僕の考えに自信がもてない。

僕は昨日、机にむかい手もとに集積したいいくつかの記録を読みくらべ、以前から録音してあるラジオ放送のテープをくりかえして聞いた。僕は容易に、それらを暗誦できる。が、レースがスロー・ペースでおこなわれるのか、ハイ・ペースでおこなわれるのかの見わけがつかない。僕には確信がない。

前半の千メートルを先頭の馬が五十八秒か、五十九秒でゆくか、六十秒でゆくか。そのちがいによって後半の展開、とくにゴール前四百メートルからの各馬の追い込みのタイミングは、まったく、別の様子をみせてくるはずである。それだけはわかっている。が、ラストの追込みのパターンや、レースの展開の模様がどうしてもつかめない。

それぞれの場合を考えてみよう。

Aが先頭に立った場合。僕は出走する十三頭の馬のレース経過を図で書き、その横に二

千メートルを二百メートルごとに必要とするだろうタイムを記してゆく。

次にBが先頭にたち、レースの主導権をとった場合も想定してみる。十三頭の走行経過は前の場合とまるつきりちがってしまう。むしろタイムも変ってゆく。前の場合にはさのみ重要ではなかった馬が、こんどは、レースの主導権と、勝敗のキャスティング・ボードを握ってしまう。その馬がレースの展開の中でどのような馬順をしめるのか、そしてどこでスパートするかなどを考えたい。

Aの場合と、Bの場合において、走る馬の素質が充分に発揮されるか、どうか、という点で話をすすめると、極端に逆の結果が生じてくる。まして、十三頭も出走すると、走ろうにも前をふさがれて力をだせない。コーナーをまわるときには、外に、外に、と、はじきとばされてしまうというケースだってありうる。加えて、雨だ。体質的に雨馬場につよい馬がいる。逆に不得手とする馬がいる。ひづめの大きさ、つまりひづめが大きければ大きいほど地面にふれる度合が多くなり、滑る率がふえてゆく。そのために、かなりのエネルギーをロスしてしまう。大幅なストライドをもって走る馬も損だ。見た目には美しい走法だが、雨の馬場では、力を浪費する。むしろ、ひづめの小さい馬、足を小刻みに掻いまくるように蹴る馬がこの際には、はるかに有利だ。

それと、僕の想像だが、気質、体質、生理、その他のちがによって、雨に叩かれると、